

白熱した選考会

佃 典彦

今回も新型コロナの影響を受けまして会場は広い会議室、アクリル板の仕切りで選考委員は距離をおいての選考会となりました。でもリモートではなく顔を突き合わせて意見を述べ合う事が出来たのは本当に良かったと思っています。画面越しのやりとりに比べて選考委員各人の迫力が全く違います、今回もかなり白熱した選考会でした。

●『砂利はポルカで踊る』

バスという移動する密室を設定したのは非常に上手いと思いました。しかもこのバスは15年間毎日毎日この町を走っている。そしてサチコはその15年間を知らない。この空白のズレがドラマを生んでいるところが面白い。緊張感溢れる出だしでワクワク読んでいたのですが、江藤が乗り込んで来た辺りからその緊張感が薄れてしまうのが惜しいと感じました。サチコが抱えている事情にももう一つ共感出来なかったです。サチコの人柄に疑問を抱いてしまったのです。

●『行き止まりの遁走曲』

何だか非常に変わった作品だと興味を持ちました。〈ニセモノ〉に対する定義が面白く納得させられました。本物など実はどこにもないのだと言われていたようで僕はとても気持ちが楽になりました。登場人物が自分の行動原理をセリフで説明してしまうのは惜しいです。劇中、ずっと歌っているというのは観劇するとどんな感じがするのか興味のあるところ。この作品の上演を観たいと思いました。

●『白地に赤く、日の丸とカップウ着』

まずこの登場人物の数に驚きました。さらに全員をキチンと書き分けて破綻がない。面白い戯曲というのは誰がセリフを言っているのかいちいち確認しなくてもスラスラ読めてしまうものですが、この人数でそれが完成している。これは相当な技術だと感服しました。ユーモアもありラストの「ちょっと待って、考えたいから」という主人公のセリフも素敵です。ふみの存在感が薄いのではないかという指摘もありましたが、鈴木選考委員の「ふみは『人形の家』のノラではないか」という意見に成程と思いました。

●『ダライコ挽歌』

非常に読み易い作品でした。こんな風景確かにあったよなぁとしみじみ思わせるところが魅力だと思います。工場から社員が抜けて行くのですが、もう少しポッカリと穴が開いた感じがすると良いのと思いました。僕には残念ながら何故に1983年から1999年の期間を選んだのかが判りませんでした。やはり2000年以前と以降では時代が違うということでしょうか。

●『クローゼットQ』

まず初めに断言します。児童劇と不条理劇は相性が良い！僕自身、かなりの本数の児童劇を書いてきましたが本当に実感しています。そしてこの作品もそうです。中学・高校生対象の児童劇として書かれた作品ですが生徒達にとってとても刺激的な作品であることに間違いはないです。惜しいのは部屋ごと連れて行かれた先の世界が少々ドラマ的にありがちな展開であること。どうせなら教訓めいた事も何も無いもっとメチャクチャな世界に連れていかれても良かったのではないかと勝手に思ったりしました。

●『その桃は血の味がする』

大阪の人ってやっぱりこんなに喋り倒すの？ っていうのが一番の感想でした。喋ることが一義的に続くのでちょっとしんどいなあと感じたのです。途中の桃源郷のシーンはあまり効果的ではない気がします。ただ新しい時代の新しいリズムの若い世代の作品であると感じました。会話自体は魅力的で家族という引力を振り切るのって力があるんだなって改めて自分の若い頃を思い出しました。

●『花を摘む人』

この作品を僕は一番に推しました。大賞に相応しい作品です。湖の底に沈んだ人々が水の底で生活している。このイメージが言葉でビシビシと伝わってきます。しかも短いセリフの積み重ねで。ラストのダムコンクリートに昼顔の根がビッシリと這っている。このイメージの力強さ。とにかく読み終えた瞬間に素晴らしい作品と出会えたと感謝しました。おめでとうございます！